第733号 平成18年6月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2006年（平成18年）
6月号（No. 733）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

目　次

ナンダ・デヴィ・プロジェクトと日本山岳会……1
平柳一郎さんとピッケル……4
支部だより……5
東海／福井／岐阜
東西南北……7
祖父・田中喜左衛門のこと／奥越の山　スキー登山の先駆者
活動報告……8
学生部／科学委員会／事業委員会／新土曜会
追悼　上條岳人さん……10
英文誌『JAPANESE ALPINE CENTENARY』第7号発行……11
図書紹介……12
図書受入報告……14
会務報告……15
ルーム日誌……16
会員異動……16
新入会員……17
INFORMATION……18
さんけん通信……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10～18時
夏季休室……8月12日～8月20日

日本山岳会と私の登山①

ナンダ・デヴィ・プロジェクトと日本山岳会

鹿野勝彦

70年代以降80年代にかけて日本山岳会のヒマラヤ登山は、高い目標をかかげながら、多くの若い登山家を育ててきた。高齢化が進む山岳会だが、当時のヒマラヤ登山を実践した若い会員に、今後の山岳会と登山を語ってもらおうと思う。1回目は、彼らを導いた鹿野勝彦氏にお願いした。

「ナンダ・デヴィに行きませんか」

梶正彦からはじめてそう声をかけられたのは1974年初夏のことだった。久々にインドがナンダ・デヴィを開放する。ただし条件はインドとの合同登山で、実施年度は1976年だが、その前年にはフランス・インド隊が予定されているという。冷静に考えれば少なからぬ問題を含む内容だったはずだが、あまりためらいもせずに私がのってしまったのは、ナンダ・デヴィという山の魅力もさることながら、チョモランマ（エヴェレスト、1970年、日本山岳会）、チューレン・ヒマール（1971年、東大）、チョモランマ（1973年、第二次RCC）という、その前5年間に私が参加したネパール・ヒマラヤでの3回の登山隊のありかたに相当にいらだちを感じていたからだ。言いかえれば、自分で納得のゆくヒマラヤ登山を、一から組みたててみたいという思いが強くなっていた。

30年余りを経た今、「日印ナンダ・デヴィ登山隊1976」というプロジェクトの立ち上げのプロセスをたどることがどれほどの意味を持つのか、正直なところ私にもよくわからないのだが、日本山岳会の、あるいは日本の登山界のヒマラヤ登山のありかたが、1970年代に大きく変わったことを前提に、当事者の一人として、当時何を考えながら計画を進めていたかを、とりあえず率直に書きとめておくことにしたい。

＊

BCに集結したメンバー。背後のナンダ・デヴィが威圧的

そのころ私が感じていたいらだちとは、具体的に記せば以下のようになる。

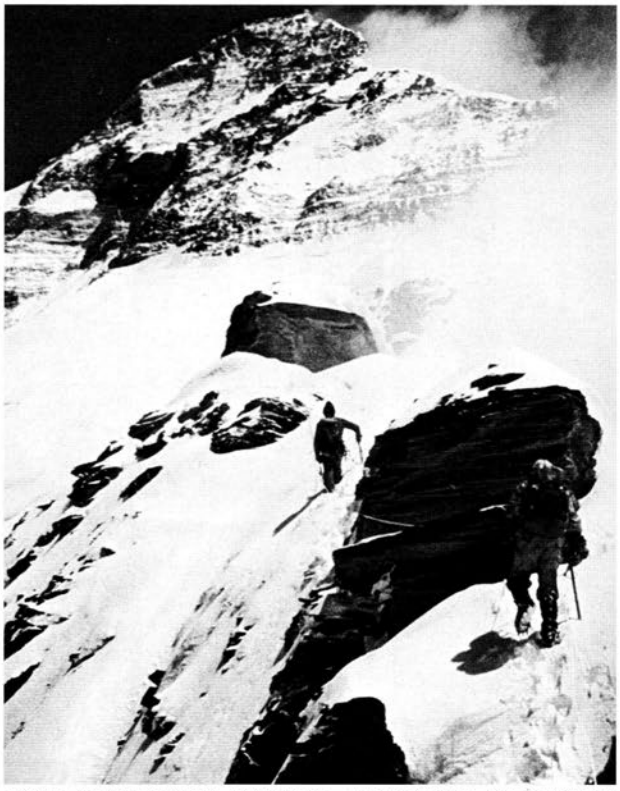
まず、登山隊ないし隊員の、目的意識のあいまいさ、である。1970年と1973年の、私が参加したこのチョモランマ登山隊は、いずれも南西壁からの登頂を主目的としてかかげていたが、それには失敗した。その結果は止むを得ないとしても、それぞれの隊は本当に当初の目的に全力を投入したといえるのか。むしろ、いつのまにか「世界最高峰」の頂上に、「日本人として」ないし「秋季」にはじめて登頂するといった、より安易な目標にすりかえられ、その「成功」に満足してしまったのではなかったか。

第二には、かかげた目標と隊の実力との明らかな差、である。1970年のチョモランマの隊は、そもそも本格的に南西壁からの登頂を狙える隊として編成されたのか。1971年のチューレン・ヒマール隊は、私自身が登攀リーダーを務め、縦走を目的にかかげていたが、これも現場に立って早々に、7000メートルを超える双耳峰の縦走など、私たちの力の及ぶ範囲にないことを思い知らされていた。そこへゆくと、1973年の第二次RCC隊の場合はむしろ個々には優れた力を持つ隊員をそろえながら、組織として機能しなかったきらいがある、と私は感じていた。

だが、それらの基本的な問題も含めて、結果を真剣に検討し、そのうえで次の計画につなげてゆこうという具体的な動きは、どの隊にも、またその周辺にも見えていなかった。

＊

ナンダ・デヴィは主峰が標高7816メートル、東峰が7434メートルの双耳峰で、インドではネパールとの国境線上にあるカンチェンジュンガを別とすれば、最高峰ということになる。初登頂は主峰が英米隊による1936年、東峰がポーランド隊による1939年と、イギリス植民地時代にさかのぼる。その後はフランス隊が1951年に縦走を試みて遭難した他は、政治的な理由から入域制限が行なわれたこともあり、1964年にインド隊が第二登に成功したくらいで、これほど著名な山にしては登山隊の数は少ない。



東峰のC1からC2へ向かう磯野、長谷川の両隊員。左の尾根が東峰から西峰へ延びる主稜線

目的は「縦走」以外には考えられなかった。デユプラによる1951年の縦走計画は、当時としては常識を超えるものだった。その後もヒマラヤで複数のピークを結ぶ縦走の試みは、私自身が手がけたチューレン・ヒマールを含めても、ごく限られており、成功の例はまだない。それだけに魅力的な課題である一方、当時の私たちの力からすれば、十分に成功の可能性はある。そう考えていた。

計画の立案にあたってのキーポイントは三つに絞った。第一はベースキャンプまでの輸送である。いわゆるキャラバンのルートとしては桁はずれに困難なリシ・ガンガのゴルジュ経由の輸送を、いかにスムーズに行なうかだけでなく、ある程度それが遅滞したとしても、可能な範囲でベースから上の登山を展開してゆけるだけの柔軟な計画と、それを実行できる態勢をつくる必要がある。

第二は、縦走隊を送り出す側と収容する側それぞれのサポート態勢を、いかに効率よく、かつ緊密な連携をもって構築するか、である。縦走といっても縦走隊そのも

のが独自に行動する範囲を主峰―東峰間と想定すれば、登山の大半は二つのピークを目指す極地法ということになる。あまりに大規模な組織を組むことは、単にスマートでないのみならず、第一点との関係から、不利でもある。ヒマラヤ登山の古典的手法であり、私たちなりに習熟もしてきた極地法の、洗練された形をどれだけ発揮できるか、特に縦走隊の動きにあわせて受け入れ態勢を整備しなければならない収容側の力量が問われる。

第三は、最終段階で未知の稜線を独力で突破しなければならない縦走隊員の、個としての力量である。そこは従来からの極地法的な登山の発想を超えた、アルパイン・スタイルの登山の実践経験がものをいう世界になるはずだ。

他にインド（具体的にはインド登山財団）との合同登山という形式をとることによって生ずる問題をどう解決し、利点をいかに生かそうと考えたか、についても触れたいのだが、紙面の関係で省略する。

＊

はじめにも記したように、このプロジェクトは、もともと日本山岳会という組織、ないしその運営に熱心に携わってきた人々のなかからスタートしたわけではない。梶にしても私にしても、会員であり、また会そのもの、ないしその学生部の登山隊に加わった経験もあったが、それだけのことだ。インド登山財団との折衝も、当初は梶が、日本山岳会との合同登山となることを前提としつつも、個人として行なっていた。

たしかに登山隊の派遣主体はある段階からは会の臨時の組織としてのナンダ・デヴィ委員会（村山雅美委員長、宮下秀樹事務局長）となり、最終的には日本山岳会創立70周年記念事業との位置づけもなされた。

6月15日、西峰に登頂した高見隊員

しかし、プロジェクトは、終始有志集団のものであり、そのチームの側からすれば、日本山岳会という組織は、計画を実行するのに便利な枠組以上のものではなかった。会の側からしても、当時の今西錦司会長の「モラル・サポートは惜しまん」という言葉に象徴されるように、基本的には有志集団の自己責任でやればよい、という姿勢が貫かれていたのであり、マナスルからチョモランマまでの、会の全力をあげて取り組む登山隊とは位置づけそのものが異なっていた。

私や梶にとって、それは望むところであった。隊の編成やインド側との折衝などについては、完全なフリーハンドを与えられたからである。隊員についていえば、半数近くはこの計画に参加するまで、日本山岳会の会員ですらなかったし、縦走やサポートの主役をになうはずのメンバーの大半は、大学山岳部のOBでもなかった。

一方で、これといったヒマラヤ登山の実績を持たない者も、数人はいた。私としては計画を動かしていくにあたっては、渉外や輸送などさまざまな局面で必要とされる、多様で異質な能力を持つメンバーを集めてチーム編成したかったのであり、登攀のキャリアだけを重視するつもりはなかった。ましてや日本山岳会での活動歴や、出身の母体などは、問題外だった。

＊

現時点でこのように勝手なことが書けるのも、ナンダ・デヴィの縦走が、幸運にも恵まれ、結果として成功したからに他ならないが、それはそれとして、このプロジェクトが、以後、チョモランマ、カンチェンジュンガ、ナムチャバルワへと続く日本山岳会のヒマラヤ登山のあり方や、そこで活躍する人材をある程度規定していったことは、たしかなようだ。ただその意味なり功罪なりを評価するのは、私の役割ではない。

ただヒマラヤ登山をめぐる状況そのものが当時とは大きく変わってしまった現在でも、目標と方法、組織と個人といった基本的な問題は、常に存在する。

拙文が今後日本山岳会からヒマラヤを目指す人々に、それらを考えるうえでのきっかけとなれば、と願っている。

平柳一郎さんとピッケル

諏訪部　豊

本年1月、平柳一郎さんが他界した。古典ピッケルのコレクターで、彼を知らぬ者はいないであろう。それほど、彼の遺した貴重なコレクションと研究成果は大きな遺産である。特に「山内」と「門田」に関する研究は、これを凌駕するものは今後行なわれないであろうと思えるほど完成度の高いものであった。これらは『山岳』第62年（「山内ピッケル抄録」、1968年刊行）および国学院大学山岳部報『足引』（「山内と門田のピッケル」、同年）に詳しい。

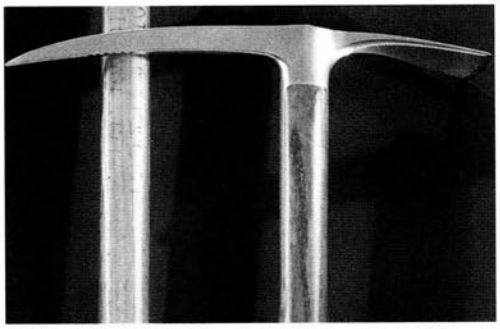
平柳さんはそれ以外にも、山岳雑誌にピッケルに関するいくつもの記事を書いている。これらの文章は常に格調高く、調査や実験によって裏付けられた自信に満ちていて読者を引きつけ、また彼のピッケルに対する愛着が並々ならぬものであることを感じさせた。

ところで、数年前から私も本格的にピッケルの収集を始めだしたが、すぐに壁に突き当たってしまった。山内と門田については前掲の平柳氏の論文があるのでその歴史については良く分かったのであるが、ベントやシェンクを筆頭とするスイス物や、シモン、シャルレのフランス物など、本場ヨーロッパのピッケル鍛冶に関する資料が余りに少なく、分からないことが多かったからである。そこで同好の士、田村朋之さんと語らって「平柳さんに教えを乞いに行こう」ということになった。恐る恐る平柳さんに手紙を書いたところ快諾を得た。そして、暮れも押し迫った2000年12月29日、町田市の自宅におじゃましたという次第である。

コレクションのピッケルを前にして

当日は平柳さんに見てもらおうということで、私と田村さんとで合わせて10数本のピッケルを持参した。それらはベントや門田のもので、今にして思えば、平柳さんにとってはどうでもいい駄物ばかりであったに違いない。しかし「俺と同じように、妙な物に興味を示す遺伝子に欠陥を持った奴が他にもいたのか」と言って、大いに歓待してくれた。

残念ながら平柳さんのコレクションの多くは大町山岳博物館に寄託されていて、手元にはウィリッシュや門田など数本があるだけだった。だが、ピッケルに対する情熱は未だ冷めやらずといった感じであった。そして山内、門田、シェンク、ベントなどについて、熱っぽく語ってくれた。しばらく歓談の後、私が「ところで山内、門田以外のピッケル鍛冶の歴史についてどの程度判明していますか」と尋ねたところ「まだ良く分かっていないんだよ」との返事であった。


平柳さんが晩年の山内東一郎に3年越しで作ってもらったピッケル（昭和39年製、第2182番、頭長35cm）

私も田村さんもこれには正直なところがっかりしてしまった。事前に準備しておいた質問への答えはほとんど得られなかった。この時は「平柳一郎さんをもってしても、世界のピッケル鍛冶の歴史は判明していないのだ」と強い落胆を覚えたのを今でも記憶している。同時に「平柳さんの未完の研究を引き継ぐのは我々だ」との意志も持った。

楽しい時はアッと言う間に過ぎるものである。半日以上もおじゃまして有益なお話を拝聴した私たちは、平柳さんと奥様の「また来なさい」という暖かい言葉に送られて辞した。

「インターネットは好みじゃない」という平柳さんとの交流は、その後、昔ながらの手紙で行なった。時には私が入手した正体不明のピッケルを送ってその鑑定をお願いしたこともあった。これについて平柳さんは「2代目シェンク作ではないか」との見解であったが、私は未だに確信が持てない。

私は、昨年念願叶ってスイスに行き、今もピッケルを作っているベントとウィリッシュの工場を訪ねた。さらに、シェンクやアンデンマッテンの家に行って肖像写真をコピーさせてもらったり、生没年を教えてもらったりした。

私は、平柳さんがやり残した研究の続きを行なっていたので「いつかこの報告をしに、平柳さんの所に行かねばならないな」と考えていた。それを一日延ばしにしていた矢先の訃報であった。初代、2代シェンクの写真を見てもらえなくて残念である。

今頃平柳さんは、生前親交のあった山内東一郎や門田茂と天国で合流し、大好きだったウィスキーを飲みながら、ピッケル談義に興じていることであろう。

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

東海支部

第10回東海岳人写真展

3月21日より26日までの6日間、支部恒例の行事となっている第10回東海岳人写真展「山と自然のパフォーマンス」を、中日新聞社共催、中部日本放送後援のご協力を得て開催した。場所は、名古屋中心地の栄中区役所市民ギャラリーである。

写真展は隔年であるが、今回で10回目を迎えた。65名の参加者で、写真75点、絵画11点を展示した。本部より、羽田栄治資料映像委員長のご尽力を受け、前回に引き続いて、皇太子殿下と橋本龍太郎元総理の作品を飾らせていただくという、光栄の機会も得られた。

支部会員の作品の中には、100周年記念行事として行なったインド・ヒマラヤ遠征、玉山・雪山の台湾登山や、ローツェ南壁登攀のルート工作時の記録もあった。

国内外ともに、登山者の撮影した作品とあって、泥臭さの中にも親しみを身近に感じられるものばかりで、来場者の評判も高かった。

26日の最終日には、愛知県押田知事も訪れ、鑑賞された。支部長が、日本山岳会の海外登山、ボランティア登山、猿投の森づくりなどの活動を説明すると、大変興味を示された。また平山善吉会長の挨拶を聞き、日本山岳会が文化活動に力を入れていることにも深く感心されていた。

4000人を超す来場者があり、成功のうちに閉会した。遠方より駆けつけてくださった平山会長、羽田資料映像委員長には、心より感謝申しあげたい。

（実行委員長　箕浦靖夫）

盛況だった写真展の会場

福井支部

分水嶺フィナーレ「若丸山登山」

福井支部の分水嶺フィナーレ登山は、森本次男の『樹林の山旅』に書かれている若丸山（1285メートル）である。富山在住の川口さんも、この本から若丸山のことを知り、ぜひ登りたいとの意向があり、5月1～2日の連休の晴れた日に登った。

福井を早朝に車で出発するので、敦賀の大和・山本・川口さんは私の山楽ルームに泊まる。この3人と山縣さんを私の車に乗せ、一路大野に向かう。国道157号線に入り、真名川沿いから真名姫湖の道に入る。周りは萌えぎ色の若葉

で気持ちがよい。

熊河に着き、車を置き、6時30分には主稜線に取り付く。今年は昨年来の大雪で、ワカンジキをはき急斜面をよじ登る。標高1000㍍を超すと、ブナの原生林である。ここからは傾斜もゆるくなり、ブナの実が白い雪面いっぱいに散りばめられていて、豊作だったことを実感できた。快晴の空に若丸山が見えてきた。県境稜線はやせ尾根のようで、雪がついていない。藪こぎが予想された。

分水嶺のピークに10時20分に着いた。その後、分水嶺踏破のため杉谷山まで行く。12時30分に戻り、お昼とした。若丸山の稜線は予想した通りのやせ尾根で、笹やシャクナゲ、つる草の藪であったため難儀した。14時40分、雪のない頂上に着いた。二等三角点があった。テント泊の装備で、77歳の老人である私が、この頂に立てたことに感謝した。この頂からは、冠越えと、兜のような冠山が見えた。冠峠から見るのとは違う山の容姿を眺め、見る場所による確認を改めて感じた。

16時20分、平たい雪の原で行動を打ち切りテントを張る。5人で、豪勢なすき焼きとビールで乾杯した。この日は、私の77歳の誕生日の前夜祭ともなった。

（宮本数男）

つる草の藪をこえ、若丸山の頂上に立つ

岐阜支部

春期懇親山行 ―卒塔婆山―

当支部の定時総会は、毎年土曜日に開催している。その夜はゆっくり懇親の場を持ち、翌日は懇親山行と決まっている。

今年は長野県に遠征して、寝覚ノ床で有名な上松町に宿を取り、上松の西11㌔の位置にある卒塔婆山に登った。非常に変わった名前だが、上松から見ると西の方の谷の奥に尖って見える。それが西方浄土を指す卒塔婆に見えたのであろうか。ありがたい山名と言えなくもない。

前夜の雨も朝方にはあがり、予定通り登山を決行する。登山ルートである黒沢林道は、入り口のゲートが閉まっている。営林署の許可はとれなかったとのことで、やむなく5㌔の林道歩き。鳥の鳴き声を聞き、蕗の葉を摘みながらの林道歩きも悪くない。

一帯は国有林で桧の植林が盛んに行なわれている。林道から分かれ、小尾根を直登する。道はないが、獣除けのフェンスが設置されており、それに沿って切り開きを行く。といっても背丈を超す笹藪や、足が地につかないような倒木帯もある。さらに、途中2～3カ所にはフェンスが横切っており、これを越えるのが大変。担当者はアブミを準備していたが、高さは2㍍を超し、特に女性陣は苦労だったようである。それでも全員、無事に頂上に着いた。

さっそく、三角点探しが始まるが見つからない。GPSによると、半径5㍍の範囲内にあるはずなのだが、全員で捜しても見つけることができない。あきらめて大半が下山にかかった頃、山桜の木の横のザックの下から、ヒョッコリと三角点が顔を出した。「あったぞー」という声に、何人かは引き返してきた。GPSが間違いでなかったことに安心して、腹の底から万歳を叫び、山頂を後にした。

（堀　義博）

やっと探し出した三角点を囲んで

イラスト＝奥野渓石

西北 東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

祖父・田中喜左衛門のこと

田中　峻

祖父・喜左衛門の会員番号は146番、今西錦司・桑原武夫・西堀栄三郎各氏と交流があった。

田中の家は、土佐に落ちた平家に発し、いつの頃か京都へ出て、物集女（もづめ）で庄屋をし、西九条に居を移し、さらに七条油小路で醤油屋を営んでいた。祖父は七代目の喜蔵と、ら以（い）の長男として明治10（1877）年に生まれた。明治29（1896）年、祖母・ウタと結婚し、六男三女をもうけた。結婚した頃から山への挑戦が活発になったようだが、ら以は跡取りの喜左衛門を厳しくしつけていて、芸事をひと通り習わせていたそうだ。

しかし、祖父は商いをやめ、昭和8（1933）年に下鴨に洋館を建て転居した。その下鴨の家の2階には8畳ほどの祖父専用の物置があり、山の道具がところ狭しと格納されていて、幼い私の恰好の遊び場であった。

物置にある道具を私がねだると「まだまだ山へ行きます。あげるものはない」とメモで返してきた。そう言いながらも、自分がリュックを誂える時に、私のために子供用のリュックも一緒に作ってくれた。比叡山の別荘へもよく一緒に行ったことを懐かしく思い出す。昭和18（1943）年、祖父は亡くなったが、病床では何のためか、手足に蛭を付けていた姿が印象的である。

昨年6月、京都大学学士山岳会の平井一正氏が、喜左衛門の話を聞きたいといって来られた。また、会報『山』725号では、没後60余年の祖父を甦らせていただいたこと、100周年記念式典にお招きいただいたことなど、祖父と共に感謝を表したい。

奥越の山　スキー登山の先駆者

鈴木正規

私が、中山再次郎のことを初めて知ったのは、昭和28（1953）年の冬山合宿の頃だった。山仲間と加越国境の大長山を登るため、谷峠の五所ヶ原部落の源野宅にベースを置いた。その時、源野さんのおばあさんから、中山再次郎さんが毎年のようにスキー登山に来て、ここに泊まっていたという話を聞いた。

そして今春、伊吹山三合目の高原ホテル正面に据えられた中山再次郎の胸像から、初めて在りし日の彼の風貌に接したのである。

中山は、慶応3（1867）年10月5日に、福井の松平藩の中山長平の四男として生まれた。明治26（1893）年、東京帝国大学文学部を卒業する。夏目漱石、正岡子規らと同期であった。翌年、新潟県立高田中学校へ教師として赴任した。そこで、白雪の風景に魅せられスキーの虜になり、谷峠の五所ヶ原部落へと通ううちに、宿の常連客となったのだろう。

その後、新たに創立された京都府立二中の初代校長になった頃から、スキーを積極的に奨励し、生徒にはあらゆるスキー競技を猛練習させたようである。大正2（1913）年からは、伊吹山、比良山、加越国境のスキー地の開拓に力を入れたようである。

特に白山付近の冬の登路として、国境のネグラ尾根の開拓とスキー場の探索には、実に11年の年月を費やした。そして、奥越と国境の山々の全山を探査したようだ。その詳細が関西スキークラブの部報に「白山、加越国境スキー紀行」として発表されている。近畿地方や北陸のスキー場が開拓され、わが国のスキー場は枯原の火のように普及されたとも書かれている。

中山は、昭和10（1935）年に古希を迎え、終戦の年には80歳であった。昭和38（1963）年11月20日に、京都嵯峨野の自宅で96歳の長寿のページを閉じたのである。

活動報告

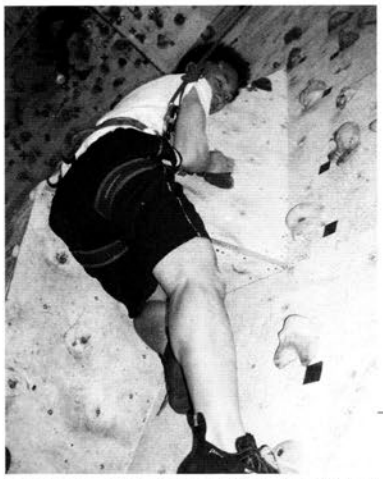
日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

学生部

新人歓迎キャンプ

4月15日、早稲田大学山岳部合宿所において、日本山岳会学生部の新人歓迎キャンプが行なわれた。当初は丹沢にて文字通りキャンプを行なう予定であったが、直前の天気予報が芳しくなかったため、予定を変更した。

日中は、大学ごとにある程度まとまって、人工壁（pump1,T Wall江戸川橋）や日和田山において、体験クライミングを行なった。最近のフリークライミングブーム（?）も影響してか、どの大学でもクライミングに興味のある新人は多かったようだ。新人たちはみな意欲的に取り組み、「山」の楽しさの一端に触れ、楽しんでいるようであった。



新人歓迎キャンプでクライミングに挑戦する参加者

夕方には各大学から続々と合宿所に集まり、懇親会を開催した。新人キャンプには37名（うち新人18名）が参加し、鍋を囲みながら大学の垣根を越えた交流の時間を持った。自己紹介での一発芸では、4年生の毎年恒例の芸が見られたり、新人の意外な一面が見えたりと、堅苦しい雰囲気を和ますのに一役かった。新人たちはすぐに打ち解け、他大学の同期と、大学生活や山への思いなどを語り合っていた。この調子でぜひ山岳部に入部してもらいたいと思う。

今に始まったことではないが、どの大学でも山岳部は新人の獲得が難しい状況にある。近年は学生部が中心となり、勧誘の日程を調整し応援要員を送りこんだり、合同の新人歓迎コンパを開いたりし、各大学間で新人勧誘の協力をできるような態勢を整えている。大学部員数の少ない今こそ、日本山岳会学生部は「山に賭ける思い」を共有できる同世代の仲間がいる場、未来の日本登山界を支える若者を育てる場として、真価を発揮すべき時期であると確信している。

今後とも、学生部の活動にご理解をいただき、未来の登山家たちに大いに期待していただきたいと思う。

（学生部委員長　澤井京太）

科学委員会

講演会「マッキンリーの気象」

4月20日、山岳会集会室にて大蔵喜福氏を講師に迎え開催した。参加者は34名であった。

マッキンリー気象観測は今年17年目を迎える。その観測を初期、中期、現在、将来、観測器材、それぞれの特徴と成果、耐久性などを実画像で示しながら比較した。設置時の作業におけるさまざまなエピソードを交えながらの説明であった。

天候については毎年の経験から、西からの低気圧をブロックする東からの風がいちばん性質（たち）が悪く、荒天の兆しとなる。南北の風はほとんど無く、天気が悪化すると、同一地点でも高度差で700メートルくらい気圧が下がる。画像を指して、「この雲が出てくると、他の登山隊は慌てて退散するが、2時間もすれば快晴に変わる」など、長年の実績からのマッキンリーのノウハウが語られた。

また、人間が耐えられる風力は33メートル程度。山田昇氏が吹き飛ばされた時は、それをはるかに超えていたことがその後の実測値で分かったそうだ。しかし、植村氏の時は、それほどの風は吹いていなかったなど、非常に興味深い話もあった。大蔵氏が観測を始めるきっかけ、お金の苦労話と秘話も披露された。

今後はハワイ、ボリビア、アラスカを3大基地として、高所拠点

観測が地球温暖化調査の一翼をになうようにと、まだまだ続く自然への挑戦を熱く語った。

（宮津公一）

事業委員会

熊野古道伊勢路と藤原岳

4月1日、江戸時代の巡礼者のように、参加者18名は熊野古道に入る前に伊勢神宮・内宮で参拝。平安時代に開かれ徳川頼宣によって土を掘り、石を敷いて整備されたという古道は、平成16年に世界遺産に登録された。

2日、伊勢路は雨の中馬越峠からスタート。濡れた石畳は滑りやすいが、杉と檜の深い森はしっとりとした空気で気持ちが良い。「語り部」のガイド付きで、夜泣き地蔵が祀られていた小祠や、峠の茶屋の散策を楽しむ。特に興味深かったのは植物であった。私の暮らす帯広とは植生が違う。杉や檜は珍しく、700種類あるというシダの種類も違っていた。本降りとなった雨にコース変更もあったが、史跡や植物を楽しみながら歩くことができた。

3日は快晴に恵まれ、松本峠・日本最古の神社「花の窟」・渚百選の七里浜や、棚田百選の丸山千枚田など多彩な内容。「語り部」の案内のもと、七里浜では伊弉冉尊（いざなみのみこと）の石碑に奉る石拾いをする。丸山千枚田は休耕地にオーナーを募集し、その結果、見事に棚田は残されていた。その風景は、田植えの頃、稲が黄金色になる頃も訪れたいという気持ちにさせた。

4日の最終日は、フクジュソウとセツブンソウで有名な花の百名山の藤原岳登山。裏登山道からの歩き出しは沢筋を遡り、まもなく尾根道になった。杉林に、カタバミやネコノメソウを見つけた。日当たりの良い斜面には、フクジュソウの黄色の花が鮮やかに咲いていた。目的のセツブンソウを探しながら登るが、なかなか見つけることができない。

伊勢路千枚田での集合写真

避難小屋に到着。さらに雪面を登りつめると頂上。遠くには白山も見え360度の視界があった。

古道、山、花と充実した山旅のなかで、珍しいマンボウ、ハナショウガの押し寿司やサルトリイバラの葉の饅頭など珍しい味も堪能した。充実した4日間だった。

（真嶋花子）

新土曜会

桃の花見会

新土曜会において、優雅な桃の花見会がいつの頃から年中行事になったのか、会歴の浅い私には知るよしもない。だが、昔より中国の花見とは桃の花とのこと。

4月8日、参加者7名はあいにくの雨ではあったが「勝沼ぶどう郷」駅に集合した。駅舎を囲む桜並木はただいま満開で「チョウ、キレイ！」の歓声があがる。

やがて古屋山梨支部長が大型バンで駅まで迎えに来てくれた。1週間ほど早いが、雨に色を増した四～五分咲き桃の花を車窓から愛でつつ、ひと回りしてもらった。

その後、「原茂ワイン園」の庭、ビニール屋根の下に腰をすえた。まずは、オーナー氏より差し入れの白ワインで乾杯。手際良く焼き鳥を焼く人、関西名物のくぎ煮、生ハム、銘酒の数々が並ぶ。さらに各自持参の逸品も登場し、野宴となる。平均年齢は喜の字か、八十路であるが、花より団子ならぬ酒肴にて、時の経つのも忘れての宴となった。

（箕岡三穂）

スーパーカイラス28日間　9/25～10/22
カトマンズ～チベット～カシュガル～クンジュラブ峠～イスラマバード
¥720,000
ゆったりチョモランマベースキャンプ15日間　10/27～11/10
成都～ラサ～シガツェ～チョモランマBC～カトマンズ　¥578,000
Wec　株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3－24－8山内ビル4階
電話 03－3437－8848　E-MAIL info@everest.co.jp

上篠岳人さん　追悼

2006年4月17日没
享年70

多くの岳人に親しまれた岳人さん

穂苅康治

岳人さんは、岳沢ヒュッテの二代目経営者であると同時に、北アルプス南部地区遭難対策協議会救助隊長であり、北アルプス山小屋友交会会長、北アルプス山小屋協会会長を歴任され、警察協力賞など数々の表彰を受けられておられました。創業者である父・親人さんは、嘉門次の孫の孫人氏と並ぶ上高地の名ガイドでした。従兄弟の経営する西穂山荘、涸沢小屋と並びガイドの経営する山小屋として、多くの登山者に親しまれてきました。

岳人さんの小屋の掃除好きは有名でバイト泣かせ、なかにはその厳しさに耐えられず、逃げ出してしまう人もいたと聞きます。いつも綺麗に磨かれた小屋からは、故人の小屋への愛着をいつ行っても感じました。その小屋が、あるべき所に見当たらないという声は、実は1月頃からあったようで、山小屋の集りで、いつになく弱気に「俺の時代は終わった」と独白されていたことが印象的でした。

岳人さんの突然の訃報は信じられない思いで聞きました。以前にも、遭難者救助活動中に落石を頭に受け大ケガをされたことがありましたが、ものともせず元気に復活されました。あの頑健な方があっけなく交通事故で逝かれてしまうとは、世の無常を感じます。

山小屋関係者の一人としても、一刻も早く小屋を再建して天国の岳人さんに安心してもらいたいと願っております。

安らかに、岳人さん。

上篠岳人（かみじょう・だけと）
1936年、長野県安曇村島々に生まれる。1956年、父・親人とともに岳沢ヒュッテ建設。1996年から現在まで、北アルプス南部地区山岳遭難対策協議会の救助隊長を務める。2006年4月17日、不慮の事故で逝去。

第8回「秩父宮記念山岳賞」の推薦について

秩父宮記念山岳賞審査委員会

第8回「秩父宮記念山岳賞」の推薦（他薦のみ）を下記のとおり受け付けます。事務局まで資料をご請求ください。多数の推薦をお待ちしております。

【対象分野】
●登山活動　●山に関する文化活動
【提出先】
日本山岳会内　秩父宮記念山岳賞事務局
【締切り】
平成18年8月末日

『きりぎりす17号』発行のお知らせ　青年部

1部 280円

国内外で精力的に登山をしている方々向けの冊子『きりぎりす17号』を発行しました。05年5月～06年1月までの山行報告です。05年夏の沢登りの国内の記録を中心に、岩や氷壁の山行報告などが盛り込まれています。

事務局にて、1部280円で販売しています。ただし、現在人手不足のため郵送販売には応じられない状況にあります。また、一部の登山用品専門店において委託販売もしています。

日本全国4000山の情報を網羅！

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集　日本山岳会創立百周年記念出版
菊判（1992頁）上製／クロス装／カバー掛け／函入り　定価18,900円（税込）

択捉・国後など北方四島の山から、南西諸島の山々まで、日本全国の山に登った、撮った、調べた、そして書いた。日本山岳会の全国25支部約500名が総力をあげて編集執筆にあたった最新・最大の山岳百科がついに完成！

――新刊　好評発売中！！――

富山湾岸からの北アルプス
佐伯邦夫著／四六判272頁／定価1,995円（税込）
魅力に富み新鮮味あふれる北アルプスの北面を熱く語る。

大峯奥駈道七十五靡（なびき）
森沢義信著／A5判312頁／定価2,940円（税込）
吉野から大峰山脈を熊野まで、修験道究極の道を克明に探査。

旗振り山
柴田昭彦著／A5判328頁／定価3,000円（税込）
山から山へ、電話が通じる以前の通信システムの全貌を解明。

ナカニシヤ出版
〒606-8161　京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地
Tel.075－723－0111　Fax.075－723－0095
URL　http://www.nakanishiya.co.jp/

英文ジャーナル『JAPANESE ALPINE CENTENARY』第７号発行

編集人　中村 保

広範にわたる内外の執筆者のご協力をえて、『JAPANESE ALPINE CENTENARY』を発行することができました。５月上旬に海外の140の山岳団体、図書館と550人の登山家、山岳ジャーナリストに発送しました。昨年10月の100周年記念祝賀晩餐会の折、アメリカ山岳会会長マーク・リッチーさんは『Japanese Alpine News』のことを「広範で価値あるクライミングの実践に留まらず、日本山岳会は遠征の記録を学術的にまとめ、世界の登山界に惜しみなく知識や情報を提供してきました。（中略）日本山岳会はこの世界クラスのジャーナルを大いに誇れるでしょう。各号に収められている詳細な地図、秀麗な写真、魅力的なテキストは、次号の発行を待ちどおしいと感じさせます」とスピーチしてくれました。ご希望の方はJAC事務局にコンタクト下さい。**販売価格：１冊3,000円（送料込み）**

B５判 338ページ
（うちカラー80ページ）

Japanese alpine news Vol.7 May 2006　目次
Cover Photo: ナムチャバルワ7782m西壁（中村 保）

序文　平山善吉
100周年記念スピーチ＆メッセージ
Mark Richey/ Nicholas B. Clinch/Stephen Venables
HarishKapadia/Ang Tshering Sherpa

Part I
A Century of Japanese Mountaineering and Explorations　日本の登山と探検の一世紀

Walter Weston and Successors in the Japanese Alps　W・ウエストン―　黎明期の日本アルプス　宮下啓三
Mountain Worship in Japan
日本人の信仰登山と近代登山　江本嘉伸
From the Japanese Alps to the Greater Ranges of the World
日本アルプスから世界の山々へ　池田常道
Japanese Mountaineering in the Himalaya
日本のヒマラヤ登山の歴史と成果　山森欣一
Japanese First Ascents of 7000m Peaks without Repeat Ascents
日本人の初登頂後、未登のヒマラヤ7000ｍ峰14座　山森欣一
Japanese Explorations and Adventures in the Polar Regions
極地圏における日本人の探検とアドベンチャー　児玉 茂
Early Japanese Travellers in Central Asia and Tibet
中央アジア・チベットにおける日本人探検家　金子民雄
A Glimpse of Modern Cartography in Japan
日本の地図および地図製作に関して　長岡正利
The Footsteps of Ekai Kawaguchi
河口慧海のチベット潜入の足跡　高山龍三／大西 保
East of the Himalaya―The Alps of Tibet
ヒマラヤの東・チベットのアルプス―概説と未踏の6000ｍ峰200座　中村 保
List of the Japanese First Ascents, Important Climbings, Explorations and Adventures in the World except the Himalaya 世界の山における日本人の初登頂・初登攀のリスト（除くヒマラヤ）　児玉 茂

●

Part II Notable Records 2005
■CLIMBS　クライミング

First Ascent of Kaluxung 6,647m in Tibet
チベット―カルシュン峰6647m初登頂　慶応大学体育会山岳部　河西瑛一郎
First Ascent of Kajaqiao 6,447m―Matterhorn of Tibet
チベットのマッターホルン―カジャチョ 6447m初登頂　ミック・ファウラー
Dobzebo: Exploration and First Ascent
チベット―中央チベット・ドブゼボ　6400m初登頂　マーチン・スコット
First Ascent of Yume Muztagh 6,345 meters
新疆省―崑崙ユメ・ムスターク　6345ｍ　初登頂　AACK　伊藤寿男
First Ascent of Tomurty 4,886 m ― Easternmost Tian Shan
―天山山脈トゥルモティ峰初登頂　福楽勣
Mountain Surrounding the Headwaters of Pare Chu Valley
― インドヒマラヤ登山・6000ｍ峰初登頂　JAC東海支部　鈴木常夫
Shivling 6,543 m：New Route Opened
インドヒマラヤ―シブリン北壁新ルール登攀（平出和也ほか）　中村 保
Climbs in Alaska―Huntington & Denali
アラスカ―デナリ・ダイヤモンド、ハンチントン登攀　横山勝丘

■SICHUAN CHINA　中国四川省

First Ascent of North Face of Potala Shan
チョンライ山系・ポタラ山5428ｍ北壁初登攀　山野井泰史
Swiss Qonglai Expedition 2005: Sep. 25―Oct. 31
チョンライ山系・Eagle Rock Peak初登頂　スイス隊
Qonglai Mountains 2005: Two First Ascents
チョンライ山系・岩峰群二つの初登頂　アメリカ隊
2005 Qonglai Range Expedition―Bipeng Valley
チョンライ山系・Bipeng谷の岩峰初登頂　アメリカ隊
Expedition to explore Xiashe Massif, Sichuan
夏塞5833ｍ初登頂　カナダ/ＮＺ隊
Attempt on Mt. Yala（Haizi Shan）5820m
海子山　Mt.Yala 5820ｍ西稜挑戦　中国/アメリカ隊
Unknown Mountains in West Sichuan
西部未踏山域の探査　山梨山岳連盟　青木 茂
Gangga 5,688m in Shaluli Shan
ガンガ山塊偵察　長野山岳協会　古畠俊彦
Hidden Mountains and Forgotten Heritages
大渡河流域の未踏の山と忘れられた遺産・石塔群　中村 保

■JOURNEYS　紀行

British South Georgia Expedition 2005
南極圏―サウス・ジョージア島2005踏査および登山　英国隊
Omega High Antarctic GPS Expedition 2005-2006
オメガ南極遠征隊の記録　オーストラリア隊
A Winter Bicycle Expedition across Far East Siberia
冬季シベリア自転車横断　安東浩正
The Descent of the Mekong River 2005
メコン川完全下降・中国―河口　東京農大探検部　北村昌之
A Journey to the Forbidden Yi'ong Tsangpo
東チベット・禁断の易貢蔵布探査行　中村 保

■RESEARCH　調査研究

Gigantic Snow Cornice on Mt. Dainichi
日本アルプスにおける雪庇掘削調査　富山大 川田邦夫
Active Faulting Crossing over the Great Himalayan
西ネパール―フラム・カルナリ川の活断層調査報告　広島大　熊原康博

●

Japanese Climbs 2005 in the Himalaya
記録 日本人のヒマラヤでの記録―2005　山森欣一

図書紹介

学習院輔仁会山岳部・山桜会編『学習院登山史(I)1887—1953　山桜特別号』

2006年3月
学習院輔仁会山岳部・山桜会発行
B5判　760ページ
頒価5000円（送料別）

本書は明治20年（なんと日清戦争以前）から昭和28年（第一次マナスル登山隊の年）に至る66年間にわたる学習院登山の歴史をカバーしている。気の遠くなるような大作であり、この難事業を成し遂げられた関係者各位のご尽力には、脱帽あるのみだ。

会社などで作る「XX年史」などという社史のたぐいは、重たい以外にとりえのないものが多い。しかし、本書に限っていえばまことに面白く、かつ読み応えのあるものとなっている。

私は、学習院の山岳部には部報というものがなく、山行記録は輔仁会という団体の記録に掲載されているだけであるという事を知らなかった。これは単に不精というものではなく、「山登りの記録などというものは、麗々しく外部にひけらかすべきものではなかろう」という当時の人々の主張によるものと聞いている。確かに一家言と言うべきであろう。本書の編集に当たられた方々にも、これら先輩達への顧慮がうかがえるが、それはそれとして、よくぞ纏められたと深甚な敬意を表したい。

9～11ページのコアパースンの一覧表を見ただけで、他の大学とは違った人脈の複雑多岐には驚くばかりである。しかも、その広範囲な交際の中で自己（学習院では〝インディビジュアル〟と称して自己の確立を重要な指導精神としていたようだ）を失うことなく、独特の気風が貫かれていることにも注目したい。

私のなかでは、板倉さんといえば北大、松方さん・泰安さんは京大、木下（是）さんは東大、という印象が強い。そのため、学習院と直接結び付く人といえば舟橋さんしか浮かばなかった。だが本書を読み進むうちに、事ほど左様に学習院山岳部OBの方々の交際の広さが認識できる。

難をいえば2キロという本の重さであろうか。しかし、十分に読み応えがある1冊であり、一読をお勧めしたい。　（山田二郎）

＊申込先＝錦織英夫宛（〒357-0044飯能市川寺57—20）

碓井徳蔵・著『わが山』

2005年7月
暮しの手帖社編集
B6判　286ページ
定価　2000円

著者の山への哲学は「山で死んではならない」であった。その著者が書いた唯一の自叙伝である。昭和35（1960）年5月に二玄社から出版されたものを、今回、著者の奥様が発行者となって刊行された。

〝私がこの本の再版を思いたったのは、彼が、本当は山男だったということを知っていただきたいと思ったからです〟との思いからの再版である。

日本中が軍国主義一辺倒の時代から太平洋戦争に突入、そして、その終局に近い日の大空襲で親兄弟を失った。そんな失意の中でも山を忘れることはなかった。終戦の3日後には、谷川岳一ノ倉沢南稜に登っている。

戦争のため職を転々としながらも、暇さえあれば山に登った。この頃の山行には虚無的な考え方もあったようだが、それでも山にと向かう。

かなり先鋭的な山登りであった。

そして、昭和26（1951）年10月から翌年3月まで徳沢園で越冬、昭和29（1954）年10月から翌年3月までは西穂山荘で越冬している。もちろん、山に登るためである。

しかし結婚後、厳しい山行は終

わりにして、登山用具・登攀技術の研究をしたり、家族との山登りを楽しむようになる。特に娘さんが生まれてからは、すべての山行は家族と共に行なわれた。

戦前から戦後へ、20余年の山との生活がユーモア溢れる文章でつづられている。

なお再版には、奥様があとがきを書かれていて、その中に、山での家族と犬の交流の話がある。1度目は中尾峠越えの時、2度目は雷鳥荘から弥陀ヶ原まで、3度目は槍ヶ岳西鎌尾根から野口五郎小屋までで、そのエピソードには驚かされる。犬好きの小さな娘さんが一緒とはいえ、たまたま出合った犬が一日中山行を共にする。それも3度、とても考えられないことだ。

著者の心を、人間より犬の方が理解していたのではないかと思いたくなるような話も書いてある。

（茂見　猛）

平成18年度年次晩餐会を名古屋で開催
東海支部年次晩餐会準備委員会

年次晩餐会は、例年12月の第1土曜日に東京で開催されていました。

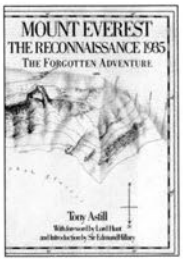
101回目を迎える本年、初めて地方で開催をすることとなり、東海支部が担当することになりました。

詳細については、今後、会報『山』にて、逐次報告しますが、概略は以下のとおりです。

日　時：平成18年12月2日(土)
内　容：午後～　　展示会・記念講演会
　　18時～　　晩餐会
場　所：ウェスティンナゴヤキャッスル
　　天守の間

翌日3日(日)には記念登山も予定しています。例年、500名から700名ほどの会員が全国から集まる大晩餐会です。これまでの素晴らしい催し物をしのぐようなイベントを計画中です。全国から、多数の会員の参加をお願いします。

Tony Astill・著
『MOUNT EVEREST』
――THE RECONNAISSANCE 1935 THE FORGOTTEN ADVENTURE――



2005年
私家版
26×18.5cm　359ページ
£30（または€48）

70年前のエリック・シプトン率いる英国隊第五次エヴェレスト遠征記が編纂された。ラトレッジ率いる第四次（1933年）と第六次（36年）の2つの大遠征隊の間に派遣された偵察を目的としたこの小遠征隊については、これまでまとまった報告書がなく、本書副題にも「忘れられた冒険行」とある。

35年の春、突然チベット政府からの入山許可を受け、急きょ編成されたこの隊は隊員7名からなる。まさに、シプトン好みの少数精鋭で、機動力に富んだ小遠征隊といえよう。

5月末ダージリンを発ち、9月末までの4カ月間に、未知のエヴェレストの東、北、西面を駆け巡り、偵察や測量を行なった。同時に、2万フィートを超える峰々の26座を登頂している。7月のモンスーン到来直前期には、ロンブクのBCを出発後わずか6日間でノース・コルに到達し、その後も好判断で危険を回避して、無傷で撤退するなど、小規模隊の機動性を実証している。

この隊の記録はシプトンの報告会で講演録の形で『Alpine Journal』や『Geographical Journal』などに掲載された。しかし、シプトンのいくつかの著書のなかに概略が見られるものの、遠征隊の全行動が詳述されたことはなかった。

その後、隊医であったチャール

カラコルムは、トレッカーを待っています。
K2・バルトロ氷河ヘリ・フライトとコンコルディア着陸12日間　東京発着
出発日：8/28・9/18発　旅行代金：548,000円
K2・バルトロ氷河トレッキング25日間　東京発着
出発日：8/25・9/8発　旅行代金：582,000円
国土交通大臣登録旅行業第490号／㈳日本旅行業協会正会員　ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪☎06-6444-3033　名古屋☎052-581-3211　福岡☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com　http://www.alpine-tour.com

図書受入報告（2006年5月）

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
滝本幸夫	日高の風——孤高の山岳画家・坂本直行の生涯	252pp/20cm	中札内美術村	2006	著者寄贈
内田榮一	房総のやまあるき	259pp/21cm	新ハイキング社	2006	発行者寄贈
同志社大学山岳部編集委員会(編)	山 その大いなる旅——同志社大学山岳部・山岳会80年の足跡	670pp/26cm	同志社大学山岳部	2006	発行者寄贈
荒賀憲雄	原郷蒼天——荒賀憲雄詩集	107pp/22cm	土曜美術社出版販売	2006	著者寄贈
芝浦工業大学カラコルム登山隊(編)	憧れのカラコルム——バルトロ・カンリⅠ峰～Ⅲ峰初縦走1976年	111pp/31cm	芝浦工業大山岳部ＯＢ会	2006	発行者寄贈
佐伯克美	登山、スキー大好き——Nature Photo & Essay	155pp/21cm	TC出版プロジェクト	2006	佐伯郁夫氏寄贈
宮澤美渚子	クロスピーク初登頂の記録——ノーバーミット登山の経緯	36pp/22cm	宮澤美渚子(私家版)	2006	著者寄贈
深井人詩(編)	文献探索2005——書誌・書誌論・堀込静香追悼文集	472pp/26cm	文献探索研究会	2006	編者寄贈
Harish Kapadia et al.(eds.)	The Himalayan Club 59th News Letter —2006	51pp/24cm	The Himalayan Club	2006	発行者寄贈
Nandini Purandare	Consolidated Index to The Himalayan Journal (Vol.1—60)	200pp/22cm	The Himalayan Club	2006	発行者寄贈
John A. Jackson	Adventure Travels in the Himalaya	256pp/22cm	Indus Publishing	2005	購入
Richard Sale	Broad Peak	208pp/24cm	Carreg	2004	購入

ス・ウォーレンが60年後の1995年に、当時の日記の一部を『Alpine Journal』に公開した。

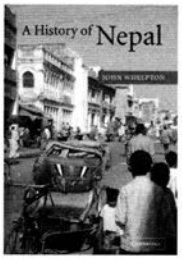
それをきっかけに、著者アスティルが参加隊員全員の手記を遺族などから次々と入手し、本著にまとめたものである。ティルマン、ケンプソンら個性あふれる隊員達のダージリン出発から帰還までの生き生きとした日々が、日記の原文と120葉にもおよぶ当時の写真の掲載により、みごとに描写されている。

前年に消息を絶った単独行者モーリス・ウィルソンの遺体と日記の発見、18年後に初登頂者となるテンジン・ノルゲイの遠征隊への初参加が綴られている。また、ニュージーランド人のヒラリーが英国隊に加わったきっかけとなったダン・ブライアントの活躍など、興味は尽きない。

英国在住の山岳書愛好家で古書のディーラーでもある著者は、シプトンがなぜ書かなかったのかの疑問が、今も解けないと述べている。J・ハントとE・ヒラリーの序文もある。

（越田和男）

John Whelpton・著『A History of Nepal』



2005年
Cambridge
University Press刊
23.5×16cm　296ページ
定価(上製)£40(並製)£15.99

ネパールの歴史書として本書は大変優れている。特に、歴史的な評価がまだできていないネパールの近代、マハラジャのラナ家による専制政治の時代に関し、英国人である著者は偏見にとらわれない史観によって正しく記述している。すなわち、ネパール人ではなかなかできないことを著者はしているのだ。また、ネパールの現代史に関しても同様である。

1960年のマヘンドラ国王によるいわゆる「王様クーデター」、政党政治の廃止とパンチャヤット制の導入、その後の国王独裁体制と1990年の民主化要求に対するビレンドラ国王による政党政治体制の復活、そして、2001年のギャネンドラ国王による政党政治の廃止と続く。その、現代政治史に関する公正な研究も日本ではなされていない。

本書の優れているところは、用語集（グロサリー）が完備していることでも明らかである。年表も役立つ。参考文献もよい。ただし本書で著者が使用した資料はかなりの部分が二次資料であり、オリジナルの一次資料はネパールにおける古文書館（アーカイブス）の不備が理由で、それほど使用されていない恨みがあるのも事実である。

本書は、現存するネパールの歴史書として最も推奨できるものである。

（神原　達）

ATLAS TREK
個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
（国土交通大臣登録旅行業1167号）
東京／〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪／〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋／〒464-0807 名古屋区千穂区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

会務報告

5月理事会

日時　5月17日　18時30分～20時15分

場所　日本山岳会会議室

【出席者】平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、吉永・贄田各常務理事、篠崎・大蔵・野口・斎藤・藤井・渡邉・石橋・古野各理事、一力監事、小倉・重廣・今村各常任評議員

【委任】石田理事、山本監事

●議事に先立ち、平山会長より、通常総会直前の理事会である。追加議案もあるので、十分な審議をお願いしたいとの挨拶があった。

【審議事項】

1　定款の一部変更（追加）について

第14条ほか8条の変更について検討し、平成18年度通常総会に提案することを決定していたが、4月29日付けで文部科学省競技スポーツ課より、第12条ほか12条分についての文言の明確化、総会定数、書類及び帳簿の備付に関する規定の創設等について指摘があった。そのため、5月15日、先に文部科学省に提出した内諾関係書を差し換えた。「新旧対照表」（案）を詳細に検討の結果、文部科学省の内諾が得られることを前提として総会に提案することが承認された。

なお、総会議案のため、評議員の意見を聞く必要があるが、総会期日が迫っているため文書をもって連絡したが、特に意見は寄せられなかった。（承認）

2　支部長交代について

①信濃支部＝中野和郎氏→金子丞二氏

②東海支部＝寺西申生氏→和田豊司氏

③北九州支部＝秦野一彦氏→大庭常生氏

以上、3支部の支部長交代があった。「支部設立並びに運営に関する規定」第9条による理事会の承認を求めてきているため、これを承認した。（承認）

3　退職金規定の改定（案）について

現行退職金規定に不備があるため、これを改定すべく案が提示された。本会の都合（例えば、リストラ等）で解雇する場合についての支給に不明確な点があるため、今後1カ月程度で調査し、再検討することとした。（継続）

4　事業委員会の予算要求について

事業委員会より平成18年度予算の復活要求が提案されている。が、事業委員会の経費支出のほとんどが交通費であることから、今後は行事計画の段階で、参加会員の会費を含む収支予算案を行事の都度理事会に提出してもらうこととし、理事会で検討の上、行事毎の支出額を考えることとした。

5　支部長・支部事務局担当者会議における質問・要望に対する回答（案）について

2月25日～26日に開催された支部長・支部事務局担当者会議における支部側からの質問・要望に対し、理事会としての回答（全16項目）が示され、検討の結果、承認された。

なお、本回答は、5月20日開催の平成18年度第1回支部長会議において支部側に提示することとした。（承認）

6　資料の写真撮影許可願い

㈱日本郵趣出版より『山形県山岳連盟50周年記念誌』中の写真（承認・有料）

7　映像の二次使用（DVD）願い

㈱NHKエデュケーションより『1970年エヴェレスト登山隊』の登頂時の映像（承認）

8　資料借用願

㈶立山カルデラ砂防博物館より「ウエストン氏の書簡」等8点…一部を除き承認（承認・有料）

9　中央分水嶺踏査事業の完了式について

多数の会員が参加した創立100周年記念事業のため、多数の会員が参加できる完了式を実施することが望ましい。今後、中央分水嶺踏査委員会を中心に日程、内容等を検討するよう指示することとした。

【報告事項】

1　総会資料について

本日、承認された定款の一部変更（追加）を加え、5月18日中に準備することとした。

2　支部長会議資料について

本日、承認された「支部長・支部事務局担当者会議」における質問・要望に対する回答を加え、5月18日中に準備することとした。

3　マナスル初登頂50周年記念事業について

(1)記念式典の延期

ネパールにおける政情混乱のため、5月9日の記念式典が延期されたが、先般、ネパール山岳協会より12月11日～13日に実施したい旨の連絡があった。

(2)〝Nepal Week in Japan〟における展示計画

日本・ネパール国交樹立50周年を記念した行事が9月16日～18日、アキバ・コンベンションホールで開催される。本会も「マナスル」に関する資料等の展示で参加予定。

4　4月13日　創立100周年記念事業委員会

特別会計の中間決算案、平成18年度の事業収支について説明があった。

5　4月14日　長期登山計画委員会

橋本副会長を中心に、この先5カ年程度の海外登山計画の立案を開始した。

6　4月22日　評議員会

平成17年度事業報告（案）・収支決算（案）について意見を聞き、通常総会に提案することとした。

7　4月新入会員　43名

ルーム日誌　5月

1日　総務委員会
8日　事業委員会　アルパインスキークラブ
9日　図書委員会　アルパインスケッチクラブ　100周年記念フォーラム委員会
10日　山想倶楽部　休山会
11日　百年史委員会　学生部　山の自然学研究会
12日　フォトビデオクラブ
15日　総務委員会　資料映像委員会
16日　山研運営委員会　インターネット小委員会　九五会
00会
17日　理事会　三水会　つくも会
18日　総務委員会　科学委員会
山の自然学研究会
20日　支部長会議
22日　中央分水嶺委員会
23日　アルパインスキークラブ
24日　常務理事会　麗山会　ゆきわり会
25日　自然保護委員会　山遊会
26日　緑爽会
29日　学生部
30日　学生部
31日　学生部

5月来室者605名

会員異動（5月）

物故

齋藤芳久（13772）04・10・13
上條岳人（4292）06・4・17
松田展夫（14083）06・5・3

退会

加藤達男（3164）山形
羽鳥　肇（4105）
柏瀬祐之（7747）
小池良吉（8937）
岡澤　弘（9152）富山
川村匡由（9420）
池田陽子（9430）山梨
小島正名（9532）岐阜
宮辻泰彦（9711）関西
本城　武（9812）宮崎
橋谷田　明（9952）福島

今年もさんけんで会いましょう

牧野　崇（10066）
相宅喜久子（10615）関西
堀川　浩（10674）信濃
早川紀代（10865）
杉谷長昭（11060）福井
大塚雄一郎（11179）
道家誠子（12173）東海
市川克己（12361）東海
山田良二（12393）東海
西山　進（12536）京都
廣田　豊（12936）
阿部径子（12993）北海道
岩佐晴雄（13207）福井
堀田その子（13846）岐阜
眞田恭司（13859）広島
住田典夫（14157）福井
終身会員
小林俊樹（5776）
松崎中正（5873）
金子　泉（5946）
松井二夫（7476）

山　733－2006・6・20（第三種郵便物認可）

INFORMATION インフォメーション

◆『写真で見る日本山岳会の100年』頒布のお知らせ

資料映像委員会

創立100周年を記念して出版された小冊子『写真で見る日本山岳会の100年』は、好評につき増刷しました。

現金渡しで1部500円、郵送の場合は700円(送料込)で販売しています。

冊数と受け取り方法を明記し、事務局（TEL03-3261-4433 FAX03-3261-4441）まで申し込んでください。

◆支部創立20周年記念スケッチ展

京都支部

会期　6月27日(火)～7月2日(日)12時～20時（最終日は17時まで）

会場　ギャラリーF（京都市中京区寺町通三条下る TEL075-221-2340）

問合　山田和男まで（TEL075-461-2367）

◆「日本山岳画協会」創立70周年記念展

日本山岳画協会

好んで山を描く専門集団の絵画展です。

会期　7月2日(日)～8日(土)11時～18時30分（ただし2日は正午から、8日は17時まで）

会場　東京交通会館、地下1階ゴールドサロン（TEL03-3215-7933）

問合　牧潤一まで（TEL&FAX049-264-7369）

◆市立大町山岳博物館における平成18年7月からの展示・催しのお知らせ

展示

■常設展「山と人とのかかわり」

会期　随時（休館日については問い合わせて下さい）

時間　9時～17時

催し

■動物写生画展

会期　7月8日～17日

時間　9時～17時（7月10日は休館日）

＊その他「山博おもしろミニゼミ」などの催しもあります。テーマなど詳細は担当者まで問い合わせてください。

問合　（市立大町山岳博物館　庶務担当・勝山TEL0261-22-0211

✉sanpaku@city.omachi.nagano.jp）

◆花の白馬岳から祖母谷へ

ゆきわり会

白馬岳周辺の花を探訪し、祖母谷温泉へ下山します。

日時　7月21日(金)～24日(月)

行程　①大雪渓コース②雪倉岳コース、下山は白馬岳～清水岳～祖母谷温泉

費用　1000円（通信・諸経費）

＊交通費、宿泊代は各自負担

申込・問合　7月10日までに参加コース①②を明記しメール、FAX、ハガキで皆川惠男宛（〒206-0034多摩市鶴牧5-17-6 TEL&FAX042-373-3003

✉minagawa_yasuo@ybb.ne.jp）

＊申込者に詳細案内送ります。

◆白山の高山植物観察会

山の自然学研究会

高山植物の観察とトレッキングを行ないます。

日時　7月24日(月)～26日(水)

集合　25日5時15分

解散　26日18時金沢駅

＊ともにバスターミナル

定員　10名（先着順）

宿泊　白山室堂（1泊3食）

費用　1万3000円（実費精算）別途往復のバス代1万4000円が必要

申込　7月1日までに舟根章宛（〒233-0012横浜市港南区上永谷1-13-13

✉funane@hte.highway.ne.jp）

＊申込者に詳細案内送ります。

◆山陰・大山全国集会の予告

自然保護委員会

日程　10月21日(土)～22日(日)

場所　大山寺

内容　自然保護委員会全国集会、

●さんけん通信●

上高地には「初めて」がいっぱい

山研管理人　内野慎一

山研開所に向け、〝塹壕〟での作業の様子

4月27日、上高地開山祭を行ないました。その朝、釜トンネルの先は冬景色そのものでした。真っ白な山は鉛色の雲に覆われ、雪も降り、山研の周りは一面の雪景色となりました。玄関へ上がる階段には、半分まで積雪があり、テラスには屋根から落ちた雪が腰の高さまで積み上がっていました。山研委員長の堀さんいわく「何年も来ているけど、こんなに雪の多いのは初めて」とのことでした。私も、去年とは比べものにならない雪の多さに圧倒されました。

開山祭が始まる時間には日が差し、午後には開所作業に取りかかりました。とにもかくにも、除雪しないことには何も始まりません。雪囲いを外すにも前の雪をどけなければならないし、通り道や階段も雪を掘らなければ荷物を運び入れるのに難儀します。そして、何よりも重要なのが水の確保です。

みなさんも見たことがあると思いますが、よく戦争映画で人がやっと通れるくらいの溝に身をひそめ、銃を構えて歩くシーン「塹壕」がありますよね。水源での作業はまさに塹壕掘りのようでした。

冬の間、水のパイプは3カ所で外して水抜きし、地面に這わせてあります。これは、雪に押されて、砂抜きのタンクやパイプの接続部分などが破損しないようにするためです。

これらを雪の下から掘り出してつながなければ、飲み水の確保もミニ水力発電もできません。雪を掘りおこす作業は、土よりは楽ですが、人間ひとりがすっぽり隠れる深さまでの塹壕掘りののち、やっとパイプに届きました。それを何十メートルも横に掘り進んで、ようやくパイプを引っ張り合わせてつなぐことができました。今年、初めてパイプから出た水、それはそれはうまい水でした。

一緒に汗を流したみなさん、本当にお疲れさまでした。後日、「こんなに雪が多いのは初めてだ」と、20数年来上高地で働いている方が話していたことを付け加えておきます。

さて、5月の中旬のある朝のことです。テラスから「こんなふうに梓川が見えたのは初めてだ」という声がしました。その声に誘われて急いでテラスに出て行きました。すると、東の明神の方向で林の向こうがキラキラと光っているのが見えました。芽吹きの葉っぱの繁る前の一瞬の季節、かつ川面が朝日に反射する時間だからこそ見ることができたようです。もちろん、私も初めて見る光景に感動しました。また、同じ山で2年目を過ごすことも私にとっては初めてで、季節を重ねることの楽しみをゆっくりと味わっています。

「初めて」がいっぱいの上高地で、今年もみなさんの来所をお待ちしています。

大山登山、自然観察散策
＊仮申込受付中　川越尚子宛（TEL＆FAX 042-321-6059）
kawagoejac@mti.biglobe.ne.jp）
＊詳細は次号でお知らせします。

❖編集後記❖

●山岳会の年次総会が、5月20日、東京・麹町の弘済会館で開かれました。初めて出席したのですが、想像以上に多くの会員が集まり、熱心に討論していたのが印象的でした。詳細は7月号でお知らせします。ただ日本の登山界を象徴するように、若い会員の出席が少なく、高齢化が切実な問題であることを痛感しました。

（神長幹雄）

日本山岳会会報　山　733号

2006年（平成18年）6月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビュウハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　平山善吉
編集人　神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社